倦怠期の夫婦みたいになっちまった幻影の魔女と淫魔の王

京谷ぜんきまる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いついたのなら書いて形にしないとダメだ。

最悪メモれよと先輩に言われたので書きました。

アンチ・ヘイトは念のためです。

※６月１６日より数週間前に本垢名で投稿していたのですが、主催者様に確認してＯＫをもらったので悪の組織杯に参加させていただきました。

個人的理由により、後で削除するかもしれません。

目　次

倦怠期の夫婦みたいになっちまった幻影の魔女と淫魔の王 ―― 1
変わった世界にて。不知火の新たなる妄想が加速し、朧はグチョグチョになった ―― 11
ブラック様はお隠れになったのだ・・・・・ ―― 21
淫魔族で珍妙な言葉遊びが流行っている模様 ―― 27
淫魔王は女の心が分からない ―― 31
お前の激しい性欲を感じる ―― 35

倦怠期の夫婦みたいになっちまった幻影の魔女と淫魔の王

「はぁ・・・・・・」

幻影の魔女、水城不知火は物憂げなため息を吐いた。

息を吐く所作さえどこか淫靡な感じがある。

不知火はかつては魔と対峙する忍、対魔忍であった。

だが彼女にとってはそのことが随分昔のことに思える。

つい先ほどまで淫魔の頂点に君臨する〝王〟の夜伽の相手をしていたところだ。

ショック死寸前の快楽に肉体は燃え上がり、いつも通りの絶頂地獄を味わわされた。

しかし――今では、それも結構、慣れてしまった。

さすがに事の最中は余裕がない。

色んな体液を垂れ流しながら、不様なアヘ顔を晒して絶叫したりしてるのだが――。

まあ所謂〝喉元過ぎれば熱さを忘れる〟という奴である。

ましてや、体の魔族化が進み、淫魔の力と肉体を得た今となっては尚更であった。

キングサイズのベッドの上で半身を起こし、遠い目をする幻影の魔女。

(はぁ～～、今とは違う別の道もあったのかしら・・・・・・今さら元に戻れないのは分かってるんだけど・・・・・・)

そんなことを考えながらポワワっとした妄想に耽る不知火であった。

――――

たとえば・・・・・・。
正体を隠したまま、不知火は娘のゆきかぜと交戦し、断崖絶壁の縁に追い詰める。
そして全身ラバーの頭部を脱ぎ、遂に正体を晒すのだ。
「アイ・アム・ユア・マザー☆」
「そ、そんな」
デーンデーンデーンデーンデデーンデーン♪（超有名なSF映画のテーマ）
「嘘だよおおおお～～～

中をかすめた空想さえも許さないってことなのかしら？　まるで何処かの独裁者みたいねぇッ」
「いやしかし、さすがに妄想でも謀反は――」
「〝全て思うがままに自由に振る舞うがいい〟とかなんとか、ドヤ顔で以前私におっしゃってなかったかしら？　あなた？」
嫌みっぽくそう言われ、「そ、そうであったな」と呻くように言った後で口を噤む淫魔王であった。

――
――
――

日を改めて不知火はまた妄想に耽っていた・・・・・・。
「うわあああぁぁぁ～～～！」
激痛にのたうち回るゆきかぜ。
攻撃しているのは黒いローブに身に包んだ淫魔王である。
「余に逆らう愚か者め！」
「ママ・・・・・・ママ、助け、て・・・・・・」
「クックック・・・・・・不知火の娘よ。そなたは死ぬ！（電撃バリバリ～!!!）」
「あぐ！　アアアアア！　お、お母さん、お願い・・・・・・」
どんどんかすれていくゆきかぜの声。淫魔王と娘を何度も交互に見つめる不知火は――。
「おい、不知火よ！」

――
――
――

「なによもう！」
「いや、なにを空想するのもそなたの自由だが、余はあんな気色の悪いローブなど着たことはないぞ!?」
「だ・か・ら、勝手に他人の頭の中を覗くなと――ツッコむところそこなのッ？」
「それに、なぜ余は皺だらけの老人になっているのだ???」
「妄想の設定に下地にした奴があって・・・・・・はぁ～～～～～、なんでこんなことを説明しなきゃならないのよ・・・・・・」
「映画を二、三本鑑賞するくらいの時間、そなたがずっと空想しているのを眺めていると色々気になってな。それに余は雷など操ったりはしな――」
「だから勝手に覗かないで！　デリカシーって物がなさすぎるわ！」
「す、すまん。おい待て、何処へ行くのだ」
「仕事よ。例のリゾートビーチの件。優雅に玉座に座っている何処かの誰かさんと違って私は忙しいの」
　そう行って部屋を出て行く不知火を引き留めることもなく淫魔王は見送るのだった。

　数週間後、淫魔王は都内のエリート高校・聖修学園の会議室にいた。
　今の姿は人間の少年だった。
「これか」
「はい、間違いないかと」
　教師に扮した淫魔族の男に数枚のディスクケースを渡される淫魔王。
「仰っていた内容と完全に一致しています。お探しになっておられたのは随分昔に人間が制作した映画でございました。世界中で今も愛好されているシリーズだそうで」
「そうか」
「続編を含めれば九作ございます。スピンオフを含めれば他にも・・・・・・さらにアニメやゲーム化もされており、黒井様のご要

望があればそちらもご用意しますが」
「いや、当面はこれだけでよい。ご苦労だった」
聖修学園の特待生・黒井竜司。
地上における淫魔王の仮初めの姿だ。
「時に――不知火の奴はもう来ているのか」
「はい。お部屋で黒井様を待っておられますよ」
「しばらく二人にしてくれ。何があっても誰も入ってくるなと皆に伝えろ」
「かしこまりました」
言いつけを終えた後、淫魔王は会議室を後にした。

聖修学園は淫魔の巣窟である。
元は鷲津グループという財閥が運営していたが、その鷲津グループの総帥や重鎮達が淫魔にすげ替えられており、上流階級の生徒達を淫魔の魔力で籠絡し、支配している。
現在は淫魔が精気を吸う格好のエサ場であり、同時に勢力を拡大させるための重要拠点と化していた。
そのため、学園内にはヨミハラやアミダハラといった魔がはびこる都市にある奴隷娼館顔負けの施設がある。
さらに地下には巨大な淫魔の宮殿が設けられている。
もちろん、そこには王がくつろげるベッドルームも存在していた。
室内はシャワーの音が微かに響いている。
そわそわした様子で淫魔王は部下から受け取ったディスクを巨大なベッドの側に据えられた鏡台の上に置き、室内にあるこれまた巨大な壁掛けディスプレイとシャワー室を交互にチラチラ見る。
淫魔王は緊張していた。しかしなぜ緊張しているのか王自身も分からないのだった。
気を落ち着けるためにベッドの縁に座ったその時――。
せわしない足音が聞こえ、バタンと大きな音を立ててベッドルームに男が入ってきた。
先ほどの会議室で会った部下である。

淫魔王の顔が、感情も表さぬ無表情となる。
だがそれだけで室内の温度が急激に下がったような寒気を部下の淫魔は感じた。
「誰も入ってくるなと命じたはずだが」
「も、申し訳ございません！　ですが――」
部下は言葉の最後まで言うことが出来なかった。
淫魔王が椅子から立ち上がり睨めつけてきたからである。
だが淫魔王は部下を見ていなかった。見ようとしたのは彼の背後だ。
「ちょっとそこを退いてもらえるかな？」
「な!?」
部下は後ろからの声に震え上がる。
いつのまにか青いフードを被った少年がいた。
病的なまでに白い肌と髪。それ以外はか細い子供に見えるが・・・・・・。
「その少年の言うとおりだ。もういい。行け」
「し、しかし」
「出ていけと言っている」
「は、はい」
部下は深々と頭を下げた後、退出していった。
「優しいんだね。逆に手下を呼び寄せると思ったんだけど」
「お前が相手では意味が無かろう・・・・・・何だその姿は」
目を細める淫魔王に少年はクスリと笑った。
「なに、君のやり方を真似たわけじゃないんだけどね。ちょっとした気分転換さ」
「ほう・・・・・・で、何の用だ？」
「用ってほどのことじゃないんだけどね。一言君に言いたいことがあってお邪魔したんだ」
「そうか。ならはやく言え」
――そしてさっさと帰れ。淫魔王の偽らざる本音だった。
いつの間にかシャワーの音が止んでいた。

「では言わせてもらうね」
　少年は一端言葉を切り、咳払いをした。なぜだがプフッと含み笑いをした後で――。
「君んところの部下ってさ、結構イロモノが多いよねっ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「いやぁ、筋肉ムキムキのインキュバスなのに何故か女装してる奴とか、対魔忍の里で色々やらかしてる子とか、他にも色々面白いのがいそうで。なんか僕、シンパシーを感じちゃってさ」
「・・・・・・・」
「それがどうしても言いたくなって来たんだ――じゃ♪」
　本当にそれだけが言いたかっただけらしく、少年は踵を返して去ろうとする。だが少年の小さな背中を見つめながら、淫魔王はわなわなと沸き起こる感情を抑えることが出来なかった。
「貴様に・・・・・・」
「ん？　なんだい？」
　振り向く少年は無邪気な顔をしていた。それが余計に淫魔王の勘に触った。
「貴様にだけは言われたくないぞ！　エドウィン・ブラック!!」
　淫魔王は少年の名前を叫ぶ。
　エドウィン・ブラック。吸血鬼の始祖。
　現状、地上においては他の追従を許さない大勢力を誇る人魔結託の巨大組織ノマドの長である。
「え、なんで？」
「イロモノ揃いはお前のノマドだろうが！　主の動向をいちいちブログに書き記し、〝今日は何回ブラック様と目が合った〟とかしょうもないことをこっそり書き込んでる秘書や、その秘書に心酔するあまり妙ちきりんな歌やブロマイドを作る小娘に内ゲバが激しい魔科医！
　あと朧だ！」
　一々説明するのが面倒かつ長くなるので、朧の事は省略して淫魔王はブラックを非難した。

だがエドウィン・ブラックは毛ほども堪えてはいないようだ。
「うん。僕は部下には自由にやらせる主義だからね。だから君にシンパシーを感じると言った」
「ぬうっ」
「でもまあ・・・・・僕直々の命令に逆らったりした場合はきついお仕置きを処してるけどね。君は最近、仕留めたはずのレディの尻に敷かれているようだが」
それは地雷原を踏み倒す発言だった。
スッと無表情になった直後、淫魔王は嘲笑しながら爆発的な魔力を発散した。
「だが余は世界の有り様をしかと受け入れている。つまらないからといってゲームのようにリセットしたりはしない」
ブラックの顔から余裕が消えた。
「知っているのか」
「貴様は他の高位魔族を見下しすぎだ。まるで癇癪を起こしたガキのように何度も何度も世界を作り替えられては迷惑きわまりない」
「口を慎め」
今度は淫魔王が地雷を踏み抜いていた。ブラックの足下から影が広がるように不定形の闇が生じる。
「淫魔風情が私と直接やり合うつもりか。誘惑が通じない相手に対しては、幻惑して不意打ちするしか能が無いくせに」
少年の姿はそのままに、口調が完全に本来の始祖吸血鬼のものに戻っていた。
「だから、他の高位魔族を舐めすぎだと言っているッ」
二人の魔力が高まっていく。室内の調度品が震え、壁や天井が軋む。
闘いが今すぐにでも始まりそうなその時――。
「うるっさいわね!! アンダーヘアの処理してる時は静かにしてって言ってるでしょ!!!!」

バン！　と勢いよくドアが開き、水城不知火が怒鳴り込んできた。
「・・・・・・・・・・・・・・・え？」
「し、不知火っ!?」
不知火はバスタオル一枚を体に巻き付けた姿で「んん？」と見覚えのない少年を見る。
「誰よその子・・・・・・見た目通りの坊やじゃないわね」
「レディ、今なんて言ったのかな」
すっかり毒気を抜かれたブラックが何か面白い物をでも見るような眼差しで、発言はアレだが突如現れたすこぶるつきの美女に聞いてみる。自分の声音にわずかに戸惑いがあるのにブラックは内心驚いていた。そのような感情が沸き起こるのは久方ぶりであった。
不知火はタオルを勢いよく脱ぐ。次の瞬間には淫靡で妖艶な白と黒を基調とした戦闘装束を纏い、ズカズカとブラックに向かって迫っていく。
「よ、よせ不知火」
「わかりやすく言ってあげるわ。陰毛を剃ってるときに！　隣でバカでかい魔力を放たれたらびっくりして手元が狂うでしょ？　だから静かにして欲しいのッ!!!」

数秒の硬直の後、エドウィン・ブラックは苦笑していた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はははっ、これは失礼した」
不知火は肩をすくめて鼻を付け合わすほど接近していたブラックから離れた。
「分かってくれればいいの。それじゃ」
部屋を出て行こうとする不知火を見て淫魔王は慌てた。
「待て不知火。何処へ――」
「気分が乗らないから帰る」
「おまっ――」
バタン。
ドアが閉まる無情な音。不知火は振り返りもせずベッドルームを去って行った。

立ち尽くす淫魔王。その背中はブラックにはなんだか小さく見えた。
「なんだか・・・・・・悪かったね」
「そうだ・・・・・全部貴様が悪い。エドウィン・ブラック・・・・・」
「えーと、急に来訪したことは謝罪するよ」
「ではその謝罪。受け入れる代わりに、今日は一晩、余に付き合ってもらおうか」
「・・・・・・・・・・・・・冗談だろ?」
・・・・・この後すったもんだした末に、酒飲みながら二人で映画鑑賞した。

変わった世界にて。不知火の新たなる妄想が加速し、
朧はグチョグチョになった

水城不知火は淫魔族の大幹部である。
『幻影の魔女』の二つ名は他の魔族勢力にも知れ渡るほどだが、ほんの数年前に誕生した元人間の淫魔ということで、同族からは胡乱な目で見られることもある。
特に古参のサキュバス達の中には〝淫魔王からの寵愛を一身に受けておきながら、王に対する態度が不遜すぎる〟と彼女を妬み、憎んでいる者さえいた。
当の不知火はどこ吹く風で意に介さなかったが、淫魔の勢力圏内にいても気の抜けない日々を送っていることもまた確かだった。
仕事から帰ってきても、気晴らしに寛ぐこともままならない。
〝余と一緒にいれば、そんな心配をすることは無い〟
そんなことを王から言われたこともあるが淫魔王と一緒にいてもやることはヤることだけであって、そればかりではつまらない。
たまにはゆっくりと酒でも飲みながら時を過ごしたい不知火である。
・・・・・実は淫魔王の方も、一緒に酒を飲みながら映画を観たりする時間を作って不知火とのマンネリを解消しようなどと画策していたのだが、そんなことは露とも知らない不知火だった。
――と、いうわけで今は淫魔の勢力圏ではないヨミハラのショーパブで独り酒を飲んでいた。
今は夜。繁盛している店なら大勢の客で賑わうところだが店内に客は不知火しかいなかった。
店構えは大きく、店内の内装も豪奢で酒もなかなかの上物が揃っている。
では何故流行っていないのかというと、理由は簡単である。
今不知火がいるのはあのノマドの大幹部、朧が経営している店だからである。

ぼったくりの価格設定と横柄な従業員。さらには朧の性癖に刺さった客や、従業員、ダンサー達が店の奥に連れ込まれて陵辱されたり調教されたりするのが続けば噂が広まり、客入りゼロになっても仕方のないことである。オーナーの気まぐれで拷問されたりする店に誰が行くだろうか。

だが不知火に取っては逆に好都合。

一人でゆっくりとした時間を過ごしたいときはよくこの店を利用するのである。

「朧様。またあの女が来ていますぜ・・・・・・いいんですか」

「いいんだよ。放っときな」

店内奥の事務所にて獲物の鉤爪を研いでいた朧は部下の男からの報告に素っ気なく返事した。

朧は、あの『幻影の魔女』がかつてあの対魔忍アサギの右腕だったくノ一なのは知っている。

だが店でおとなしく酒を飲んでいるだけなら特に問題は無い。

まあ、最初に不知火が来店したときは手籠めにしようと手下と共に襲いかかって返り討ちに遭い、ついでにドロドロのグッチョングッチョンにアレコレされたりしたのだがそのことは新入りの部下には黙っておく朧だった。

(はぁ～～～～可愛かったなぁ。ビーチリゾートで会ったあの対魔忍の男の子。名前は鹿之助っていってたっけ。)

カラン、と氷の音を鳴らしながらグラスを見つめる不知火。そこに栗色の長髪を垂らした小柄な少年の姿がポワワッと浮かぶ。

女性と見まごう雅な顔立ち。にもかかわらず年相応・・・・・・いやそれよりも幼さを感じさせるあどけなさに思わずぞくりとさせられる。

瞳の色は薄いアメシストのようで、笑顔が一番よく似合うが、怯える心を奮い立たせて敵と対峙したときは紫電を纏うようにその表情は粛然としていて、あれぞまさに対魔忍の美貌の少年だ。

まるで無垢な魂そのものを掘り磨き上げて創造されたかのような子だった――と不知火は心中で述懐する。
（何歳なんだろう。ゆきかぜより年下？　いやでも任務に出るくらいだから五車の中等生ってことはないわよね。じゃあ同い年ぐらいか。あぁ・・・あんな男の子が欲しかったなぁ・・・・・・・・・・・・・いやむしろ・・・・・・。）
ポワワッとした妄想は不知火の中でドロリと淫らな粘りを見せはじめる。瞳を潤ませ、もどかしげな吐息を漏らすその姿は淫魔の気を濃厚に発散していた。
（あの子に私が孕まされるってのも・・・・・・ありかもね♡　フ、フフ、ウフフフ・・・・・・。）

一方その頃、聖修学園地下の淫魔宮殿内にある小劇場並みの規模のホームシアター室にて、淫魔王と少年ブラックは丸一日とさらに半日かけて、某超有名なＳＦ映画シリーズをぶっ通しで鑑賞し終えたところだった。
「・・・・・・わからん。スカイウォーカーとはなんだったのだ。そして、フォースとは。ライトサイドとダークサイドとは・・・・・・」
そう呟き、片手で頭を抱えながら俯く淫魔王。ブラックはクスクスと笑いながら立ち上がり、備え付けのガラスケースから新たな酒瓶を取り出す。
「多分そんなに深く考えてないんじゃないかな。７作目からの続・三部作の制作に、この作品を創り出した作者は関わってないしね」
「!?　そうなのか？」
「エンディングスタッフロールもちゃんと見なよ・・・・・・」
「信じられん。人間にしては相当な時間と手間をかけたはずだろう」
「人間というのは時に、自ら作りだしたものが手に余って、放り出したりしてしまうものなのさ。『創作』もだけど・・・・・科学の『発明』なんかもそうじゃない？　〝我は死なり。世界の破壊者なり〟ってね♪」

ブラックは二つグラスに琥珀色の酒を注ぎ、一つを淫魔王へと向ける。
「・・・・・・オッペンハイマーの言葉なんぞ口にするな」
淫魔王は不機嫌そうに片頬をピクリと歪ませて、吐き捨てるようにそう言った後、受け取った酒をあおった。
「おや、彼が嫌いかい？」
「核兵器を生み出した男だ。ヒトを滅ぼしかねない危険物を作ったのだぞ」
「ま、僕らを頂点捕食者とするなら人類が滅ぶような事態は避けないといけないのは確かだね。でも彼が着手しなくても、いずれは誰かが作ったさ」
「・・・・・・実際、地上で米連と中華連合の軍が台湾で衝突した時、核戦争になる可能性があったな。エドウィン・ブラックよ。貴様が毎回アレに介入するのはやはりそういうことなのか」
ブラックは肩をすくめた。
「さて、なんのことやら。ところで、僕が世界の再創造を何度か繰り返してる件だけど――」
「おい蒸し返すな。昨日の言い争いは痛み分けで水に流すのではなかったのか？」
「いや、そうだけど。聞きたいのは前世界の出来事を記憶しているのなら、賢明卿が得た未来の情報も把握してるのかなって」
「・・・・・・知らいでか」
未来の情報。
それは魔界に君臨する九貴族の一人、賢明卿ことブレインフレーヤーの女王マルジャーナがもたらしたものだ。
彼女の眷属であるアルサールが全ての時代、全ての多次元世界において唯一無二として存在する強力な秘宝『テセラック』を用いて人類を汚染し、地上世界を滅ぼして全魔族をも衰退の道に陥れるという・・・・・・。
人と魔にとっての絶望の未来。
「だからか。今回の君が妙に人間に対して優しいのは。人間の精気が

糧ではあるが、この世界で淫魔達は人間を拐かして苗床にしたりしてないもんね」
「そういう貴様も、ヒトを実験動物のように扱うのを今回は止めているではないか。あの井河アサギに干渉するのも控えているだろう？」
「フフ、まあその分起こる変化を修正しなくちゃいけないのが面倒だけどね」
「・・・・・・心願寺紅がノマドの次期総帥になるという話は本当なのか？」
「もう就任したよ。おかげで優雅な隠居生活さ。だからこうしてフラフラしてるってわけ」
「・・・・・・・・・・どうやったのだ？」
　淫魔王は咳払いをして、ブラックと目を合わせずに尋ねた。
「ん？　なにが？」
「いやだから、紅の母親をどうやって――」
「誘拐して魔界に連れ込んだりせずに、普通に交際を申し込んで付き合いを始めて、あとから正体を明かしたのさ。対魔忍達と仲良くしすぎてるせいで今回の世界ではものすごく他の九貴族のあたりが強いけど」
「よくもそこまで・・・・・・変えられるものだな」
「いやだなぁ。新しい役を演じていると思えばいいんだよ♪　昨日のレディ・・・・・・水城不知火だっけ。君ももっと上手いこと立ち回ればよかったのに」
「できればそうしたい。しかし紅と同様、不知火の娘のゆきかぜは誕生しなければならない存在だ。余にはどうしようも――！！！！！！！！！！！！？？？？？？？？？」
　淫魔王はガタッと勢いよく立ち上がった。
「あれ？　どうしたの？」
　ブルブルと身を震わせている淫魔王をブラックは面白そうに見つめながらちびりと酒をなめる。
「エッヘッヘッヘッへ・・・・・・・」
「マジでどうしたの急に・・・・・・皇帝パルパティーンみたいな愉悦笑いをしちゃって」

淫魔王の体の震えはどうも歓喜によるものらしい。
笑い声は次第に大きくなり、呵々とした大笑へと変わった。
「ハーーーッハッハッハッハッハッハ！　やったぞ!!!　ついに！　遂に余を受け入れてくれるか不知火！　待っておれよ！　気が変わらぬうちに！　すぐに、今すぐに！　そなたの元に行くからな！」
「・・・・・君さあ、遠くにいるときも彼女の意識をずっとストーキングしてるの？　そういうことするから嫌われ――っと」
淫魔王の人間体、黒井竜司の姿が闇そのものの奔流に変じると、空中へと飛翔し、ホームシアターの天井に盛大に破壊して大穴を開けながら何処かへ飛び去っていった。
一人取り残されたブラックは天井の大穴を見つめながら、
「面白そうだから見物させてもらうよ♪」
と、淫魔王の後を追うのだった。

ドガァァァァ――――――――――――――――――――ン！
爆砕音とともに不知火のいるショーパブの入り口が弾け飛んだ。
魔界都市ヨミハラにとってこのようなことは日常茶飯事であるが、ノマドの大幹部の経営する店ではそうそう起こるものではない。
「なに!?」
不知火は立ち上がり、もうもうと立ちこめる砕けた建材の粉塵の中に現れた男を見て仰天し、そしてげんなりした。
「何してるのよ・・・・・・・」
ショーステージの舞台袖から従業員を引き連れた朧が飛び出してくる。
「あたしの店にカチコミかけるとはいい度胸だねッ。どこのどいつだい！」
淫魔王には朧の声など聞こえていなかった。不知火だけを見つめながら不知火の声だけを聞きながら、一歩一歩近づいていく。
「よくぞ・・・・・・よくぞ決心してくれた水城不知火よ!!!　この時をどれほど待ち望んできたことか。我が愛おしき幻影の魔女よ・・・・・」

「いや、意味分かんないんだけど。一体どうしたのよ急に――」
「おい！　無視すんじゃないよ！　あんた一体何者だい!?」
淫魔王は不知火の自分の間に立ちふさがった朧を見てやっと存在に気づいたように彼女を見つめた。
「ノマドのイロモノ幹部は下がっていろ」
「だっ誰がイロモノ?? ・・・・・なっ、くっ――んごぉぉぉぉふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!????」
!!!

朧はもう口がきけなくなっていた。
淫魔王の背後の空間に亀裂が生じ、そこから無数のお約束のアレが出現して朧に殺到したのである。
それはまるで堰を切った濁流のようだった。触手の怒濤に押し流され、朧は一瞬だけ鉤爪で数条の触手を断ち切って抵抗したが、すぐに武装を剥がされ、戦闘スーツをズタズタにされて――。
「ちょ、ちょっと・・・・・・止めてあげて。朧と仲がいいわけでもないし借りがあるわけじゃないけどお気に入りの店のオーナーだし――あ、貫通した」
何が、どこからどこまで貫通したのかはさておき、朧の言葉にならない呻きと無数の触手が蠢く擦過音。そしてビチャビチャとか、ミチミチ、グポっといった水音や空気音をＢＧＭに、淫魔王は据わった目をしながら不知火に囁く。
「心配するな不知火・・・・・・そなたはもっと凄いことになるから♡
」
「ヒエッ・・・・・・い、いやいや！　急にどうしちゃったのよ!?」
「しかと聞いたぞ・・・そなたの心の声を。願ったではないかッ。孕みたいと！　淫魔の母になる決心がついたのであろう！」
「な!?　あなたまた私の心を覗いて！　あっ」
後ずさりながら壁際に追い詰められた不知火は淫魔王に手首を掴まれ、身をよじった
「や！　やあよッ！　あなた勘違いしてる！　ちょ!?　やめ――」

「何が勘違いだというのだ！　遠く離れていたが『孕みたい』というそなたの思念だけはしかと感じ取れ――」
「だれもあなたの子を産みたいとは言ってない!!!」

「え〟っ」
　しゅん・・・となった淫魔王が肩を落とし、不知火の腕を掴んだ手を離した。一気に脱力したせいか、朧をドロドロに溶かさんばかりにあんなことやこんなことをしていた触手も消失する。
　宙に浮いていた朧が色んな体液がない交ぜになった水たまりの中に落ちた。
「ハァッ、ハァッ・・・・・・もう、とんだ勘違いよ！」
「す、すまなかった――」
　呆然とした表情で淫魔王は反射的にこたえたが、思考停止した状態から段々と疑念が湧いてくる。
　――ん？　いやでも確かに不知火の孕みたいという思念は感じ取ったぞ
　――どういうことだ？　孕みたい。だがそれは余の子ではない。
　――つまりそれはッッッッ
　再度、今度は壁ドンしながら不知火の腕を掴む淫魔王。
「痛い！」
「だ、誰だ！　不知火！　誰の子を産みたいと思ったのだ!!??」
「ほ、本気じゃないわよ！　前にもいったでしょ!?　頭の中でチラッと思ったことを真に受けないで!!!」
「でもほんのちょっぴりは思ったのだろう！　余の子を孕みたいとはそのほんのちょっぴりすら思ってくれないのに!!!」
　ゴホン、という咳払いが背後から聞こえ、
「落ち着きなよ。今の君はとても見苦しい」
　淫魔王は歯がみしながら振り返った。少年ブラックがそこにいた。
「でしゃばるなエドウィン・ブラックッ。これは淫魔族にとって一大事なのだ」
「口を出すに決まってるだろ。ここはノマドの縄張りで今し方、君が

性欲爆発ドッカンギンギンの孕ませ最大パワーでグチャグチャにしちゃったのはノマドの幹部なんだけど？」
「・・・・・・」
「それに、レディの密かなお気に入りの名前を聞いてどうするの？探し出して殺すのかい？　君も僕と同じように今回はやり方を変えるんじゃなかったのか？」
　淫魔王は床に倒れたままの朧を見た。「あっ、あっ、あ・・・・・」と断続的に声を漏らしながらビクンビクンと痙攣していて、見るも無惨な有様だ。
　続いて不知火を見つめる。不知火は視線に気づくとぷいっと横を向いてしまった。
「――ッ」
　淫魔王はその場から逃げるように走り去っていった。
「・・・・・・あらら」
「君は昨日の坊や・・・・・・あなたがノマドの総帥、エドウィン・ブラック・・・・・・」
「助けたお礼と言っては何だけど僕のことは誰にも言わないで欲しい」
「・・・・・・わかったわ」
「ありがとう」
　ブラックは倒れている朧の側に行って座り込む。
「おい、朧・・・・・・だめだ。完全に壊れてる」
　どうしようかとブラックは思案する。
　この世界でブラックは対魔忍の甲河家を滅ぼしてはいない。
　甲河朧の死体がなければ朧は誕生しないことになる。
　だが、朧という存在はいなければいないで寂し――面白くなかった。
　色々と苦労して別のやり方で生み出した存在だ。
　ブラックは自らの右手首を左手の爪で切り裂いた。
「特別サービスだぞ、朧よ」
　ブラックはつかの間、本来の口調に戻ってそう呟くと、右手首の傷

口を直接、朧の口にあてがって血を飲ませた。
　すると朧の瞳に生気が宿り、カッと目を見開いてブラックの手首を握って強く吸った。
「ん――ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク！」
「ちょ、くすぐったい」
　そこで声にハッと気づき、朧は顔を上げた。
「ブ、ブラック様」
「うん」
　朧は半身を起こして周囲を見回し、そしてもう一度ブラックを見つめた。
「・・・・・・・・・・・・もしかして、あたしを助けてくださったんですか？」
「ん～～～～、まあそうなるかな」
　カアッと頬を赤らめ、目尻をだだ下がりにしながら朧は喜色満面になった。
「はぁ～～♡　あ、ありがとうございましゅぅぅ♡」
「ただ、このことは誰にも言っちゃダメだよ？」
「はいっ。仰せのままにっ」

　この後、朧はエドウィン・ブラックに助けてもらったこと、血を直飲みするという恍惚とした体験と栄誉をノマド総帥秘書のイングリッドにメチャクチャ自慢し、イングリッドは家出した。

ブラック様はお隠れになったのだ・・・・・・

東京の地下三百メートル。
そこにはいつから存在していたのか、一つの都市がすっぽり収まるほどの巨大な空洞があり、そこに闇の無法都市ヨミハラが存在する。
街の最北にはノマドの闇の宮殿があり、宮殿最奥には魔界へと通じるゲートが存在している。宮殿はかつてはノマドの日本支部だったが、ノマドの新総帥の座に心願寺紅が就いてからは本部へと昇格していた。
バァン！
弾かれたように開いた扉から現れたのは漆黒の肌に緋色の長髪の美女――ノマドの総帥秘書にして魔界騎士のイングリッドだ。
「紅!!　いや、総帥！　話がある!!」
「イ、イングリッド!?」
執務室の椅子に座っていた紅はびっくりしてやつれた顔を上げた。
「私は秘書の職を辞し、野に下る！　秘書の仕事はリーナに引き継いだ！　では――」
「いきなりなにを――いやいや！　待って待って待って！　そんなの無理ぃぃぃ！」
「止めてくれるな！　やはり私は自分の心を偽ることは出来ぬ・・・・・私が忠誠を誓うのはブラック様のみ！」
執務室から出て行こうとするイングリッドを止めるため、突風のような風と共に紅の肌が浅黒く変化し、青白を基調とした対魔スーツを深紅の衣に変容させながらの本気モードで、イングリッドの前に立ちはだかる。
「父上に言われたでしょ!?　〝紅の補佐をしっかり頼むぞ〟ってッッ」
「ぐッッッ、大丈夫だ、問題ない。リーナに引き継いだといっているだろう」
「あの子に組織の運営が務まるわけ無いでしょ!!??」
実際にノマドという大組織はイングリッドの手腕無くして成り立

たない。
　多国籍複合企業という表の顔から、人魔結託の秘密結社として世界各国の闇社会を掌握するという裏の顔。そして、対魔忍と裏協定を結び、敵性高位魔族の地上進出を未然に防ぐという真の目的・・・・・。
　これらの大仕事をやってのけるにはノマド新総帥・心願寺紅にとってイングリッドは要の存在だ。半人半魔の――しかも対魔忍の血を引いている――紅にとって、唯一友好的な高位魔族といっていい彼女の出奔を認めるわけにはいかなかった。
　他の幹部連中はというと・・・・・魔科医のフュルストは好き勝手に人体実験やその他アブない研究を禁じられてふてくされており、いつ裏切ってもおかしく無い状態だし、朧は拷問と調教と殺戮以外の仕事はやってくれない。
　ちなみにリーナとはノマドの騎士軍に所属する騎士だ。
　イングリッドに心酔する彼女は厳しい鍛練を積んで、魔剣サクラブロッサムと風の力を操り、その実力は準魔界騎士クラスといったところだが、おそらくいや確実に戦働き以外はあまり役に立たない。
　それに――。
「お前が出て行ったら絶対にリーナも後を追っていなくなっちゃうだろ！」
「本人には強く言い聞かせている。心配は無い」
「心配しかないのよぉぉぉ!?」
「あらあら、それでいいのかしらイングリッドさん。自らの責任を放棄するなど、それこそあの方のご不興を買うのではなくて？」
「ふぁ!?」
「――ッ」
　現れたのはあの朧だった。
　いつもの戦闘服と両手にかぎ爪といったスタイルでは無く、白いシャツにタイトスカート。おまけに銀縁の細長い眼鏡まで付けている。まるで誰かの女教師スタイルを真似たかのような出で立ちだ・・・・・似合ってはいる。だが、女教師やビジネスウーマン・・・・・・・・・・・ものの、アダルトビデオへの出演がもっ

とも似合ってそうではあった。
「きっさまぁぁ！　その気色の悪いしゃべり方をヤメロォ！」
イングは魔剣ダークフレイムの柄に手をかけながら激昂していた。
「あーら、ごめんあそばせ。確かにこーゆー話し方はまだ慣れてなくて・・・・・・でも、私は心を入れ替えて組織のために働くと決めたんですの。なにせ・・・・・・」
朧は、にまぁ・・・っと嗤いながらタメをつくって、
「前総帥であるエドウィン・ブラック様に直接命を助けてもらって、その血を注いでいただき、さらに！　尊い血が滴る手首の傷口に口づけをしながら直に、直に！　口吸いさせていただく栄誉を賜ったのですから！」
「・・・・・・父上が？　ホントに？」
「ホラご覧になって♪　紅様」
おそらく監視カメラの映像だろう。朧が差し出してスマホにはそこには少年姿のエドウィン・ブラックと素っ裸でいろんな濁液まみれになってる朧が映っていた。イングリッドはというとプルプルる震えながらそのスマホ映像を絶対に見まいとするように顔を背けている。
「本当だ・・・・・・父上だ。んんん!?」
画面端にもう一人、白黒の妖艶な戦闘スーツを着た女性を見て紅は目を丸くした。
（この人、たしか数年前に失踪した水城不知火さん・・・・・・これ、どういう状況・・・・・・）
「ホラぁ、ホラぁ!!　イングリッドさんももう一度よくご覧になってッッッ」
ぐいぐいと押し付けるようにスマホを見せつける朧。イングリッドは両耳を手で塞ぎながら顔を背け続ける。
朧は無音だった映像の音声を大音量で再生した。
『特別サービスだぞ、朧よ』
『ブ、ブラック様』
『うん』

『・・・・・・・・・・・・・もしかして、あたしを助けてくださったんですか？』
『ん～～～、まあそうなるかな』
編集されているようで朧とブラックのやりとりが延々とループされる。
「や、やめろ朧。イングリッドをこれ以上刺激するな――――イングリッド？」
耳を塞いでいた手を離し、イングリッドは朧と紅に背を向けたままスッと無言で背筋を伸ばした。
その次の瞬間――――。
「ぬあぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!!!」
「ちょ!?」
「おっと♪」
振り返りざまに魔剣ダークフレイムを横薙ぎに一閃。全てを焼き尽くす黒い炎が巻き起こる。
紅は朧を庇いながら魔力と忍法の風の複合障壁を発生させてそれを何とかしのいだ。
朧はというと紅が守ってくれるのを見越していたのか、余裕の笑みを浮かべている。
（人魔合一のこの状態でなかったら、深手を負ってたぞ今の!?）
イングリッドは泣き叫びながら既に遠ざかっていた。
「あ、あぁ・・・・・・行ってしまった・・・・・・」
「ククク・・・・・・」
後を追うかどうか迷っている紅はふと気がついたことがあり、そろそろと朧の方を振り返った。
「と、時に朧。さっき〝心を入れ替えて組織のために働く〟と言っていたけどあれは本当かな・・・・・・？」
「ええ本当ですよ――なわけないだろぉぉぉー!?（ゲラゲラゲラ）」
ガバッと某極道ファンタジーゲームの早脱ぎの如く衣服を脱ぎ捨て、いつもの戦闘スーツ姿に戻る朧。
「だよね・・・・・・」

「アッハッハッハ！　さっきの高慢なピンク髪女の泣きっ面！
〝うわあああああぁぁぁん〟って、クハハッハ、ガキかよ！
あー・・・・・・腹痛い」
腹を抱えてひとしきり大笑いした後、急にスンッとしたチベスナ顔になって朧は執務室から出て行こうとする。
去り際に、ニヤッと片頬を歪めながら、
「ま、拷問や調教、殺戮その他荒事の際はお声がけくださいな♪　新総帥サマ♪」
朧が去った後、しばし立ち尽くす紅。
キュッと尻の形が変わるくらいに括約筋に力が入り、次の瞬間には尾てい骨辺りから大量の発汗が生じる。
「い、胃が、胃が痛い・・・・・・・」
鳩尾の奥がキリキリと痛み、前かがみになって胸を手で押さえる。
・・・・・紅はストレスで逆流性食道炎を煩い、緊張すると大量のケツ汗をかくようになってしまっていた。

東京都内某所。一見バーのような内装のとある事務所の奥の部屋にて。

バァン！

「父上！　やっぱり戻ってきて――!?」
蹴破るような勢いで扉を開けて入室した紅は目を丸くした。
真っ暗な室内。部屋の奥には長机があり、六つのマルチディスプレイが青白い光を発している。
少年ブラックは椅子に座り、モニターの前でカチャカチャとキーボードを叩いていた。
「紅よ、用件は手短に話せ。父は今、新たな大仕事に取りかかっている最中なのだ」
「じ、実は・・・・・・・」

話を聞いている間、ブラックは一度も紅の方を振り向くことは無かった。あいかわらずキーボードを叩きながら時たまボイスチャットでのやりとりしている。
「イングリッドはノマドに必要だ。何としても呼び戻すのだ」
「いや、だから父上・・・・・・」
「私はノマドに戻らないし戻れない。重大な仕事があると言ったろう」
「いや、でも父上が今やってるのそれ、ゲームなんじゃ――」
「〝一家団欒は世界平和のあとに〟」
「は？」
「娘よ、悪の組織が蔓延る死と暴力とグロテスクな陵辱が巻き起こるような物語の世界で、悪の組織が悪を為さなくなったらどうなると思う？」
いきなりの話題転換。いきなりの問いかけ。
紅にとって父は謎めいた存在であり、よくあることだったので話に合わせることにした。
「・・・・・・平和で幸せな物語になる？」
「違うな。それは世界の有り様ではない。時の歯車はパラドックスを拒むし、誰かが大きな役割を放棄すれば、因果に乱れが生じる。役割を担える別の何かが、理を無視して・・・・・・いや理を破壊してでもこの世界にクロスオーバーして、修正を仕掛けてくるのだ」
「ごめんなさい。意味が分からない」
「・・・私は、今回のお前を――」
「え？」
「なんでもない。さあ、もういけ」
それっきりブラックは喋らなくなった。
どうあってもノマドに戻ってはくれない。力も貸してもらえないと悟った紅は項垂れ、暗い部屋を出て行った。

淫魔族で珍妙な言葉遊びが流行っている模様

アンブローズは淫魔族の男――インキュバスである。
それも高位のインキュバスだ。非常に整った顔に鬼族顔負けの屈強な肉体を持つが、それよりも・・・・・・というより〝それ故に〟というべきか。薔薇をあしらったドレスのような真っ赤な衣装と渦巻く波を表現したような紫色の髪が印象的だった。化粧もかなりケバ・・・濃いめである。
前衛芸術のような奇抜な出で立ちは強烈で一度見たら忘れられないインパクトがあった。
今、淫魔の宮殿にてアンブローズは淫魔王に呼び出されていた。
「ご機嫌麗しゅう。我らが王よ」
玉座に腰掛けている王の表情は心なしか愁いを帯びているように思えた。
「よかった。お前というインキュバスがいて・・・・・・質問をしたい。アンブローズよ、強さとは・・・強さとは一体何だろう？」
（ゑ？　な、なんなの・・・いきなり??）
普段のオネエ口調で心中戸惑いの声をあげるアンブローズ。だがすぐにハッと気がつく。
（あ、そうか。これは最近はやりの・・・・・・）
なぜか最近、淫魔達の間で人間が創作した映画やコミック、アニメやドラマが流行しているのをアンブローズは思い出した。
特に『物語に登場するキャラクター達のセリフ』をもじった言葉遊びが持て囃されていることも思い出す。
幸いなことにアンブローズは淫魔王が言ったセリフに思い当たる作品を知っていた。
（バキね！　格闘漫画の金字塔！　その死刑囚編でドリアン海王が烈きゅんに問うた言葉だわ！）
彼は身を震わせて感動した。アンブローズは男の美と女の美を極めた、美の頂点を目指している。
インキュバスゆえに相手を魅了する魔力や夢を見せる能力は女に

しか作用しないのだが、いずれ女だけでは無く老若男女から精気を献上される究極の淫魔になることが彼の目標である。
　そして究極の美は究極の肉体と究極のファッションにあると考えているアンブローズにとってバキシリーズは筋肉面において聖典に等しい存在だった。
　そんなバキを淫魔王も知っておられる・・・・・強烈なシンパシーを感じて感極まったアンブローズは涙が出そうになった。が、そこは我慢して答える。
　王の御前で不様は見せられない。
(でも、さっすが我らが王！　いい趣味してらっしゃるわぁ。ここは完璧に返答しなくちゃ♪)
「己の意を貫き通す力。我が儘を押し通す力。私にとっての強さとはそういうものです（キリッ）」
「・・・・・・では淫魔にとっての強さとは？」
(お、ここからはオリジナル展開ねっ。えっと・・・)
　アンブローズは淫魔ながらも実直な男だった。ほぼ即答で答える。
「魅了(チャーム)の力と相手に夢を見せる能力です。その力と性技を研鑽し、そして何よりも美を磨き、人間の精気を、愛を、魂を、相手自ら献上させることが淫魔の真の強さかと存じます」
「献上させる、か。お前らしい考え方だ。お前ほどの力があれば意思など関係なく相手を虜にすることも精気を奪うことも容易いだろうに」
「量より質を私は選びます。催淫や魅了の魔力で安易に骨抜きにするよりも、心の底からの愛と共に極上の精気を捧げられることを常に目指しています・・・・・ですから無防備な人間の夢に忍び込んで快楽を仕込むなどといったやり方は自ら禁じております。そこには愛がありませんからっ」
「ぐっは!!!（吐血）」
「(うわっ!!王が血を吐いちゃったわ!?)ど、どうかなされましたか?????」
「・・・・・・何でもない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふむ・・・・・・・精気は分かる。我らの糧だからな。魂も分かる。だがアンブローズ

よ、愛とは何だ？」
「えっ」
（えぇ・・・・・・これどう答えればいいの・・・・・・・・バキＳＡＧＡネタで返せばいいの？　いや多分違うわね・・・・・・・・えーと、えーと）
　すぐには答えられず困惑するアンブローズ。苦し紛れに人間達がしたためた辞書に記載されているような当たり障りのない内容を言ってみる。
「えっと、相手を思いやる事とか。お互いを大切にしあうこと・・・・・自分を犠牲にしてでも好きな相手を守ったりつくしたりすることかと・・・・・・あ、でも自己愛や分け隔て無く慈しむ隣人愛というのもありますね・・・・・・」
　淫魔王は身を乗り出して彼を見つめた。
「では・・・・・・愛は真実か？」
（さっきよりも質問の内容が難しくなった!!???）
「愛は・・・・・・愛は人間が作った概念だ。死の恐怖に対する防衛手段と理解しているが、時々起きる感情の説明がつかない。余にとってもそういう感情を抱かせる相手は・・・・・・存在している。一応な・・・・・・気に入らん。愛は空想の産物なのか、実在するのかどっちなのだ？」
（ふ、深い。深いわぁ・・・・・・さすが淫魔王様。でもバキネタじゃない私の知らない作品ネタぶっ込んできてるから、どう答えていいか分からないわっっっ）
　そのとき、アンブローズの背後から軽快な少年の声が響いた。
「回答不能な質問です。愛の概念は存在する。よって空想の産物であっても有益です」
　抑揚が無く、読み上げソフトのような口調だった。
　背後を振り返ったアンブローズは驚愕半分安堵半分といった表情で後ろにいた少年の名を口にした。
「黒斗くんっ」
　黒斗――少年姿のエドウィン・ブラックはニコッと笑って言葉を続

けた。
「必要であるが故に存在する。答えうる質問があるとすれば〝なぜ愛は必要か〟です」
淫魔王が舌打ちして立ち上がった。
「おや。続けないのかい？〝では何故愛は必要なのだ？〟って」
「貴様はこのドラマのセリフを知っているのだから答えは決まっている。だから続ける必要などない――遊びに付き合わせて悪かったなアンブローズ。下がってよいぞ」
憮然として立ち上がり、ブラックと共に謁見の間を去ろうとする淫魔王。アンブローズは慌てた。
「えっ、あの、その、差し支えなければ続きをお教えいただけないでしょうか。なぜ愛は必要なのです？」
淫魔王とブラックは振り返った。
「意味が理解できない」
「そう、だから情報を足していくしかないね」
二人は交互に、乾いた声で淡々と答えた。
アンブローズにとって吸血鬼と淫魔の王は自分が目指す魔族の頂そのものだ。
その頂点に立つ二柱の返事が単にドラマのセリフを言っただけなのか。それとも、彼らの本音なのか。アンブローズには分からなかった。

淫魔王は女の心が分からない

聖修学園地下の淫魔宮殿内にあるホームシアターは一度、荒ぶった淫魔王の力で半壊したがすぐに修繕されて利用可能となっていた。

魔界九貴族の一人・・・・・・幻夢卿こと淫魔王カーマ・デヴァと少年の姿をしたエドウィン・ブラックはそこでまた、某超有名なＳＦ映画の、今度はアニメシリーズを視聴していた。

例によって数日間ぶっ通しの視聴である。

「なるほどな・・・・・いささかアナキン・スカイウォーカーのダークサイド転向が急展開過ぎるとＥＰ３を観ていた時は思ったものだが、この３Ｄアニメシリーズを見た後では納得できる。ジェダイ騎士団の組織としての硬直ぶりは実に興味深い」

そう言いながら、淫魔王はまじめくさった顔で両手を組んだ。

「まあ、このクローン戦争という壮大な茶番劇に付き合っちゃった時点でジェダイ・オーダーの破滅は免れなかっただろうね。全てはパルパティーンの掌の上だったんだから。長期計略とはかくありたいもんだね・・・・・・結構危ない橋を渡ってた気もするけど」

そう言いながら酒をあおるブラック。

「だが・・・・・・一つ解せぬことがある」

「ん？　なに？」

「アソーカ・タノのことだ」

アソーカ・タノ。

映画シリーズしか知らぬ者には聞き覚えの無い名前だろうが、３Ｄアニメ『クローン・ウォーズ』においては実質、主人公ともいえる女ジェダイである。

赤い肌に二本角のような白い感覚器官が特徴のトグルータという種族の少女でＥＰ２からＥＰ３までの中間期にアナキン・スカイウォーカーの弟子（パダワン）だった彼女の作中での活躍はめざましく、勝ち気で無鉄砲な性格は女性版アナキンともいえる存在だった。

彼女をアナキンの弟子に割り当てたのはあのジェダイ・グランドマスター・ヨーダだ。

よく似ていながらも楽観的な性格のアソーカを弟子に持つことで、アナキンの成長を促そうとしたのだ。ジェダイの師弟関係はいずれ終わりが来る。その時にアナキンが執着を捨てる教訓を得られるように・・・・・・と。

しかし実際はそうはならなかった。

クローン戦争もいよいよ煮詰まってきた頃、アソーカはジェダイ聖堂の爆破テロと殺人の容疑にかけられた。

〝アソーカ・タノは銀河共和国とジェダイの教義に背き、罪を犯した〟

それを殆どのジェダイマスターが疑わなかったことに彼女は衝撃を受け、汚名を晴らすために逃亡するのだが・・・・・・。

結果としてアナキンの活躍によって無実は証明されたものの、ジェダイへの信頼を失った彼女はジェダイ・オーダーに背を向け、アナキンの元を去ってしまうのだ。

この別離は耐えがたいものとしてアナキンの心に刻まれ、またジェダイ評議会への不信を募らせるきっかけともなる。

「アソーカがどうかしたの？」

「なぜアナキンはアソーカを引き留めなかったのだ」

「いやだってそれは――」

「本当に手放したくないなら手籠めにしてでも側に置きたい・・・・・・いや置くべきだろうが」

「おいっ!?」

淫魔王の発言に珍しくブラックは動揺し、驚き混じりの声をあげた。

「ちゃんと観てたのか？　アナキンはパドメ一筋だったろう!!??　彼にとってアソーカは妹のような存在で――」

「で？」

「は？」

「妹のような存在だから何の問題があるのだ？」

「ああそうだったわ!!　目の前に居る色黒イケメンは人間じゃ無かっ

たわ！　淫魔だったわ！　しかも淫魔の王！」
　ヒステリックなブラックに淫魔王は思わず心の中でほくそ笑んだ。
　これほど動揺している始祖吸血鬼の姿などそうそう拝めるものではない。
「何を今さら」
「いいか!?　どんなカップリングを脳内設定するのもお前の勝手だが私の前で口にするんじゃない！　耳が穢れる！」
「大げさな・・・・・・そなただってこれまで散々、鬼畜の所行を為してきたくせに」
「今回の世界じゃやらかしてないから！　大体君は、人間の、女の心を理解したいんじゃ無かったのか!?　ひとっっっっつも学んでないじゃないか！　頭ん中ヤることだけかッ」
「それ以外に何があるというのだ。〝試しなどいらん。やるか、やらぬかだ〟とヨーダも言っていたではないか」
「やかましい！」
「あら、ダメよ黒斗くん。我らが王に女心なんて分かるはずないんだから♪」
「不知火？　いつからそこに」
「シーズン7が始まった辺りからいたわよ？（シーズン7だけまだ観てなかったのよね・・・・・・・）」
　不知火の思念をストーキングすることを止めていた淫魔王も黒斗ことエドウィン・ブラックも、彼女の気配を察知できなかったことに大いに驚いた。
「それはどうかな？　余ほど〝女〟を理解している男はいないと思うが」
「・・・・・・本気で言ってるのかい？　それ」
「多分本気で言ってるわよ彼・・・・・・」
「あのね？　魔力で強制的に洗脳したり官能を支配して堕とすのと、心を理解するのとは全然違うことだよ？」
「・・・・・・・・・・・・・違うのか」
「ほらぁ！　全然分かってないじゃないか」

「はぁ」
呆れ顔のブラックと不知火に押され、淫魔王は反論した。
「いやまて。余にとって魔力を使わずとも女を御すなど造作も無いこと。ならば理解することもまた可能なはずだ」
「なんなのその屁理屈」
「口ではなんとでも言えるんだよなぁ・・・・・・」
「ぐぬぬ・・・・・ならばどうすればいいのだっ。これは愛の概念と同じで、証明のしようが無いではないかッッ」
「あら、そんなことはないわよ。たとえば困っている女性がいて、その女性の悩みを理解し、救うことが出来れば心を理解できたと言えるんじゃないかしら」
「ほう？　面白いではないか。余は淫魔の王。すべての女を支配する者ぞ。救うことだって容易いわ」
淫魔王の大言に不知火とブラックは顔を見合わせた。
そして、まるで示し合わせたかのように同時に淫魔王を見つめる。
「・・・・・・・・・・・・・言ったな？」
「・・・・・・・・・・・・・言ったわね？」
「・・・・・・・・・・・・・・る？」
なにやら乗せられてしまったと気づいた淫魔王だったが〝時すでに遅し〟である。

この後、忍の里・五車町にある対魔忍養成学校『五車学園』の新任カウンセラーとして黒井竜司という名の男が着任することとなった。

魔力を使わない。
女に手を出さない。
Ｒ１８カテに該当することをやらかさない。
この三つの縛り条件で『対魔忍の女性をカウンセリングで救う』という淫魔にとって地獄のようなゲームが開始されるのであった。

お前の激しい性欲を感じる

〝お前の激しい性欲を感じるぅ・・・・・・・ッ〟

〝そ、そんな・・・・・・・嘘、嘘です〟

〝お前こそ、自分を偽っておる。性欲はそもそも全ての動物に備わっている最も原初的な本能の一つだ。そしてお前達人間はさらに性欲を『色欲』へと進化させた。呆れ果てるほどの性快楽への渇望・・・・・・実に素晴らしい！　しかもそなたは敵組織の虜囚となり調教を受け、淫乱の気質を開花させられた。〟

〝で、でも、治療を受けました　〟

〝肉体は治療されたかもしれん。媚薬も抜けたことだろう。だが心はどうか。分かっているのであろう。対魔忍の女よ。淫らな衝動が常にくすぶっているのをッ。さあ、己を解き放つのだ。お前に必要な物は余が持っている――」

「だめみたいね・・・・・・」

「初っぱなからゲームのルールを守る気無いのはさすがに興ざめ・・・・・」

盗聴器で黒井竜司こと淫魔王・カーマデヴァの診察室の音声を拾っていた水城不知火と黒斗はため息をつきながらイヤホンを外し、突入準備をするのだった。

五車学園の心理カウンセラーは重要な役職だ。

学園裏の地下には対魔忍本部もあるため、カウンセリングの対象は五車学生のみならず現役の対魔忍全般にわたる。

五車学園は対魔忍を育成するための施設だが、政府による対魔忍の監視機関としての役割も兼ねているため、長期間現役を遠ざかっていた対魔忍達が復帰する前のメンタルチェックなども行うので重要かつ激務でもある。

任務中の負傷や戦闘ストレス障害、虜囚の身になった時に受けた洗脳・調教からの治療と療養の後、心身共に健常かどうか。任務に復帰

できるかの最終診断を下すのだ。
繰り返しになるが重要な仕事なのである。

バァン！
勢いよく五車学園・カウンセリング室のドアが開けられ、不知火が現れた。
その後ろには黒斗が控えている。
「そこまでよ！」
「まったく黒井先生、あなたにはガッカリ・・・・・・・ん？」

室内には女性対魔忍が一人いた。見るからにモブっぽい忍装束を着ている。
顔も忍頭巾と鉢金をキッチリ装備し、顔を隠しているが、それでもプライバシーが守られているはずのカウンセリングでの闖入者二人に、顔を真っ赤にしているのが不知火達には見て取れた。
対面の黒井竜司が差し出していたアイテムをさっと奪うように受け取ると、診断を受けていたくノ一は不知火と黒斗の間を猛スピードで駆け抜け、一目散に退室していった。
「そなたたち、さすがに無作法であろう・・・・・・」
やや憮然とした表情で黒井こと淫魔王は立ち上がった。
「・・・・・・えっと」
「ねえ君、さっきの女性に渡していたのって・・・・」
「避妊具と薬だ。ゲームは続行中だぞ。今、まさしく余は一人の女を救ってやった。どうだ不知火よ」
「えぇ・・・・・・」
「真面目に仕事してたのか。それはそれでちょっとつまらない――っていうか、言い方が不穏すぎるんだよ。相手をダークサイドに引きこもうとするような台詞回しやめろ！」
「なぜだ。性交は陰と陽二つの側面をもっている。先ほどの女は明らかに陰の部分を否定しようとしていた。自らの淫ら心をな。それでは精神のバランスを崩し、愛を否定したジェダイのように身の破滅を

招きかねないではないか。清濁併せ呑み、調和を保つことが肝要なのだ。淫魔の長として色欲地獄に堕ちないための極意を教えるのは甚だ遺憾だがゲームだからな・・・・・・」
「・・・・・・」
何か言い返そうとして黒斗は結局止め、くノ一が腰掛けていたソファーに座る。
「で、さっきの彼女に避妊グッズを渡してどういうアドバイスをしたの？」
腕組みして聞く不知火に淫魔王はこともなげに言った。
「性欲を解消するように五車内の施設を使えと言っただけだ。だが出来ることなら体だけでなく精神の結び付きもある正式な〝つがい〟としてのまぐわいが一番だとも助言しておいたので、今頃はマッチングアプリでも活用しているのではないか」
「施設？　マ、マッチングアプリ？」
「あれ？　知らないのかいレディ。いまの対魔忍達には少子化対策や結婚推奨のための様々な設備やシステムが用意されているんだよ。気軽にエクササイズできるジムやＶＲＭＭＯルームとか、対魔忍専用マッチングアプリ『対魔忍でも恋がしたい』とかね」
「不知火は長らく五車町不在であるから知らぬのも無理からぬことだ」
しれっと言う淫魔王に不知火は口角を引き攣らせた。
（誰のせいだと思ってんのよ）
「・・・・・・・・・・・・なるほど。せっかく五車に来たんだからそのジムやＶＲＭＭＯルームってのに寄ってみようかしら」
「そんな必要は無いだろう不知火。ムラムラしたなら余が――」
「あなたはゲームの途中でしょうが」
「いやまて、もう女を一人救ったではないか!?」
「一人じゃまぐれかも知れないでしょ？　それにさっきの彼女が本当に悩みを解消できたか経過を見る必要もあるし・・・・・・そうねえ、その間あと百人ぐらいはカウンセリングしてもらわないと」
「百!??　ぐぬぬ・・・・・・分かった。だが余がゲームに勝った暁には

一緒に宮殿に帰るのだぞ！」
（そこはキレて強引に犯したりはしないんだなぁ）
淫魔王と不知火を交互に見ながら、肩をすくめる黒斗だった。

黒井竜司のカウンセリングは五車内で評判になった。
成果も上々で、黒井の薬を使用しない治療を求める対魔忍達は日に日に増していった。
ゲームの目標も軽く達成できそうな勢いだった。
ただ、若手の中では最強と目される対魔忍剣士、秋山凜子が潜入任務中に体を汚された（任務は成功）ことでカウンセリングを受けに来た時は、淫魔としての欲望衝動が不知火の時を除けば過去最大級に膨れあがり、ほぼ襲いかけた――いや襲ったのだが、Ｒ１８モードになることだけはギリギリ免れ、事なきを得る――などという一幕もあったが、淫魔王のカウンセリングは順調だった。

――だが一人のくノ一の業、その人間の心の闇に触れ、淫魔王が鬱になりかける事態になったことがあった・・・・・・。